

2011 年度報告書（研究員）

氏 名	土田陽子
職 位	短時間研究員
<p>研究概要</p> <p>都市規模と学校の威信に差が見られる和歌山県立和歌山高等女学校（和高女）と京都府立京都第一高等女学校（府一）の同窓会誌を比較検討し、公立名門高等女学校卒業生たちの「あるべき女性像」を描き出すという、前年度の「次世代研究ユニット」で行った分析をさらに深めるため、2011 年度は「論説記事と講演会記事」「同窓会組織の活動」の 2 点に絞ってより詳細な分析を行った。その結果、以下の点を指摘することができた。</p> <p>まず学校側が望む卒業後のあり方についてまとめよう。1910 年代～1920 年代の和高女では、第一次大戦後の物価高騰や食糧問題、生活改善運動など主婦として取り組むべき課題について政府の方針に沿った行動を卒業生たちに期待していた。また社会情勢や知識に関する記事内容も、家庭生活といかに関連しているのかという観点から伝えられていた。そして常に国家の一員であるという自覚と心構えをもつことの重要性が強調されていた。一方、和高女より威信の高い府一では、主婦としての心構えや日々の生活にかかわるような内容はほとんどなく、一人の人間として高い知識と教養を身につけることの大切さが説かれていた。両校の主張の違いは、婦人運動に対する反応にもあらわれていた。和高女でも婦人運動への理解は一応のところは示していたものの、具体的に何らかの行動を起こすことは期待していなかった。しかしながら府一では、府一卒業生が取り組むべき課題を女子高等教育の実現に的を絞り、主に寄付金の要請という形で卒業生たちの協力を仰いでいた。ところが 1930 年代に入るあたりから、両校の主張にはさほど違いが見られなくなっていった。女性の特性として「愛の力」と「母性愛」をことさら強調し、戦時体制期に入ると政府の方針に沿ったかたちで国民としての自覚と女性の責務が語られていた。</p> <p>では卒業生側の動きとして同窓会組織はいかなる行動をとっていたのか。分析では同窓会活動について、「思い出共同体」やミドルクラス以上の階層女性にふさわしい趣味を楽しむ仲間集団の形成といった側面とは異なる活動に注目した。その結果、和高女も府一も母校や女子教育の充実・発展と、女学校卒業後の学びの場の企画・運営に向けた積極的な組織活動の様子が浮かび上がってきた。そして両校とも、戦時体制期には結婚準備教育ともいえる実用的な科目に主力をおいた「花嫁学校」と、保育や幼児教育施設を運営していたことが明らかになった。</p>	
<p>業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）</p> <p><論文></p> <p>2011 年 11 月「近代和歌山市における公立名門高等女学校の利用層 一文教地区の成立過程に注目して－」（単著・査読あり）『神戸女子大学教育諸学研究』第 25 巻 PP.53-65</p>	